

広瀬始親撮影写真にみる初期公営住宅の暮らし

—— 昭和30年頃の県営藤棚アパートを事例として ——

青木祐介（横浜都市発展記念館）

1. はじめに

横浜都市発展記念館では、2014（平成26）年10月11日～2015（同27）年1月12日の会期で、特別展「あこがれの『団地』—高度成長とベッドタウン横浜」（担当：岡田直）を開催した。この特別展では、昭和30～40年代にかけて横浜の郊外で大規模な住宅地開発が進み、横浜が東京のベッドタウンとして「住宅都市」化していく過程と、新たに登場した住宅団地と「ダンチ族」と呼ばれた当時の人々の生活環境やコミュニティ、団地とともに顕在化した社会問題などが、多様な資料にもとづいて紹介された。

近年、博物館の展示において高度経済成長期の団地を取り上げたものが増えてきている。その嚆矢となったのは松戸市立博物館（1993年開館）の常設展示であり、1960（昭和35）年に日本住宅公団によって建設された常盤平団地の住宅が原寸大で復元されている。その後も、同館での企画展「戦後松戸の生活革新」（2000年）をはじめ、パルテノン多摩（1998年）や北区飛鳥山博物館（2003年）、吹田市立博物館（2006年）、八千代市立郷土博物館（2007年）など多くの博物館の展示で団地が取り上げられており⁽¹⁾、2010（平成22）年に新規オープンした国立歴史民俗博物館の第6展示室（現代史）では、「戦後の生活革命」として、1962（昭和37）年に建設された赤羽台団地の一室が再現された。

これらの展示は、各地域における住宅地開発のストーリーをベースに、昭和30年代以降の新しいライフスタイルをもたらした存在として団地を大きく取り上げている点で、多くの共通項をもっている。なかでも「2DK（ダイニングキッチン）」というそれまでになかった住まいのあり方を示し

ながら、全国的に住宅地開発を進めた日本住宅公団（以下、公団と略して表記する）の団地は、当館の特別展のタイトルにも示されたように、まさに「あこがれ」の存在であった⁽²⁾。

『横浜市史Ⅱ』では、団地の始まりを、1955（同30）年の公団設立におき、公団による瀬谷団地（1956年）・日吉団地（1957年）をその嚆矢として「第一類型」とし、その後の高度経済成長期に建設された1000戸を超える大規模団地を「第二類型」として区別している。そして団地の登場によって変化した市民生活の特徴として、①夫婦と子どもという近代家族、②家電製品を用いた電化生活、③各部屋が鍵で閉じられた個室となり、従来の近隣コミュニケーションに代わって、④団地内に自治会が結成され、あらたな「公共性」を担っていくことが挙げられている⁽³⁾。

一方で、公団による団地建設以前にも、公営住宅として全国で住宅団地の建設はおこなわれている。本稿で取り上げる神奈川県営藤棚アパート（1948～50年）もそのひとつである。公団の団地が「生活革新」の明るい生活イメージとともに全国に普及したのとは対照的に、公営住宅については、低所得者層のための住宅という認識が一般的なのではないだろうか。そうした初期公営住宅での生活についての実像を写真資料をもとに紹介し、のちの「あこがれの団地」の世界と比較してみようというのが本稿の試みである。

団地をテーマとした展示のなかでも、松戸市立博物館での企画展「戦後松戸の生活革新」は、一人のカメラマンが撮影した膨大な写真資料が残されていたことで、ある家族の生活の変遷を明らかにできた貴重な成果であるが⁽⁴⁾、本稿で紹介する広瀬始親^{もとかか}撮影写真（以下、広瀬写真と表記する）も、そうした個人カメラマンの撮影によるまとま

った写真資料のひとつである。横浜開港資料館が所蔵する広瀬写真は、生糸貿易関連の貿易会社広瀬商店に勤務していた広瀬始親氏（1915～2013）によって昭和30年前後の時期に集中して撮影されたもので⁽⁵⁾、2007（平成19）年に、横浜開港資料館・横浜都市発展記念館の共催による企画展「広瀬始親写真展 横浜ノスタルジア 昭和30年頃の街角」⁽⁶⁾で紹介され、2011（同23）年には、企画展「広瀬始親写真展 横浜ノスタルジア・特別篇 昭和30年頃の街角」⁽⁷⁾としてさらに多くの写真が公開された。またこのときに同名の写真集も刊行された⁽⁸⁾。

これらの企画展で紹介された写真は、昭和20年代後半から30年代前半にかけて、戦後復興を遂げていく横浜の街の情景や、そこでの人々の豊かな表情を捉えたものが中心であったが、広瀬氏が撮影した写真のなかには、広瀬始親・千恵子夫妻が当時住んでいた県営藤棚アパート、およびその室内を撮影したものも多く含まれている。藤棚アパートについては、特別展「あこがれの『団地』」でも、住宅団地の建設が始まる昭和20年代の事例として紹介されたが、あくまで初期の事例であって、展示全体の趣旨からは踏み込んで取り上げるものではなかった。

そこで本稿では、広瀬写真をもとに、特別展では十分に取り上げられなかった横浜における初期公営住宅の住環境とその生活の一断面を、1955（昭和30）年前後の藤棚アパートを事例として紹介したい。なお、本稿は特別展の関連講座として、「あこがれの住まいの誕生～『2DK』とは何だったのか」と題して話した内容の一部をもとにしたものである。

2. 公営住宅の標準設計と「2DK」の誕生

本稿で取り上げる県営藤棚アパートについて述べる前に、初期公営住宅としての藤棚アパートを位置づける作業として、のちの公団住宅を特徴づける「2DK」の住まいが誕生するまでの経緯を概観しておきたい。

「2DK」とは、2部屋の和室＋ダイニングキッ

ン（食事室兼台所）からなる間取りのことを指すが、「2DK」の原点となったのが、「51C型」と呼ばれる国の標準設計である。「51C型」の成立は、近代住宅史の通史のなかで必ず言及される大きな画期であるが⁽⁹⁾、ここでは、実際に「51C型」を考案した当事者の一人である鈴木成文（1927～2010）の回想⁽¹⁰⁾などをもとに、「51C型」誕生の背景を振りかえってみたい。

終戦直後、国内は深刻な住宅難の状況にあった。全国でおよそ420万戸の住宅不足が推定され、神奈川県内でも住宅総数の半数を超えるおよそ23万4千戸が不足すると算出されていた⁽¹¹⁾。1945（昭和20）年9月4日、政府は年内に「応急簡易住宅」30万戸を建設するための要綱を閣議決定するが、極端な物資不足とヤミ取引の横行により、翌年3月までに8万3千戸を建設するのがやっとであった⁽¹²⁾。

復興住宅の政策は、当初は厚生省が担当していたが、1945（同20）年11月に戦災復興院が設立されると、以降は復興院へとその業務が移管される。復興院では1946（同21）年5月に「復興住宅建設基準」を決定するが、内容的には復興住宅政策の展望というべきものであり、実際の建設基準の検討が始まったのは同年11月に「住宅基準調査委員会」が設置されてからである。ここで国庫補助による賃貸住宅の標準設計が検討され、1947（同22）年度、1948（同23）年度にそれぞれ「47型」「48型」がまとめられている。

ここで注目されるのは、1947（同22）年度の基準が「一般基準」と「木造基準」だけであったのに対して、翌48（同23）年度では、不燃化集合住宅を想定した「鋼筋コンクリート造住宅基準」と「一団地住宅基準」が追加されていることで、後述するとおり、本稿で取り上げる県営藤棚アパートは、このときの標準設計「48型」にもとづいて建設されたと考えられる。

その後、政府の住宅政策としては、1950（同25）年5月に持ち家の建設を支援するための「住宅金融公庫法」が、翌51（同26）年6月に低所得者層のための公共賃貸住宅を建設する「公営住宅

法」が制定され、国民が「健康で文化的な生活」を営むための法的整備がおこなわれた。さらに第2次鳩山一郎内閣の住宅建設10カ年計画を受けて、1955（同30）年7月に制定されたのが「日本住宅公団法」で、その建設主体として設立されたのが日本住宅公団（現・都市機構）である。

この日本住宅公団が建設する住宅団地の各戸の標準設計としてベースになったのが、「51C型」である（図1）。「51C型」とは、1951（同26）年度に定められた標準設計のことで、16坪（A型）・14坪（B型）・12坪（C型）と3種類ある住戸規模のうち、もっとも規模が小さいものである。この年度の「国庫補助住宅設計構造審議会」の基本設計部会の委員の一人が、当時東京大学建築学科の助教授であった吉武泰水（1916～2003）で、吉武を中心に大学院生だった鈴木成文らによって検討・提出された案が委員会で評価され、実施設計（C型）担当の久米建築事務所（現・久米設計）によって図面化された。

「51C型」の間取りの最大の特徴は、台所と食事室を一体化したことであるが、その理論的背景には、1942（昭和17）年に発表された西山卯三の「食寝分離論」があった⁽¹³⁾。5千件にもおよぶ庶民住宅での住み方を分析した西山は、台所に隣り合って2畳という食事用の狭い空間があること、6畳・4畳半という2室構成の住宅では、家族の人数が多くなっても6畳にまとまって就寝する

例が多いことに注目し、寝る部屋とは別に食事の場を確保することが住み手の基本的な要求であるという結論を導き出した。この「食寝分離論」は、戦後西山が発表した『これからのすまい』（1947年）⁽¹⁴⁾でもあらためて提唱され、夫婦や家族のそれぞれの「分離就寝」の主張と合わせて、住空間の機能分化という考え方は「51C型」の誕生に大きな影響を与えた。

一方、卒業論文で日本鋼管川崎製鉄所の工員住宅の住み方調査をおこない、大学院でも横浜の横浜造船・日本冶金・東京ガスの社宅調査をおこなっていた鈴木成文は、西山による「食寝分離論」を念頭に置きながら、さらに住み方に影響を与える因子として間取りを想定していた。鈴木は、主室（6畳）と副室（4畳半）のどちらが台所に接しているかによって、家族の就寝形態に影響が生じることを明らかにし⁽¹⁵⁾、また畳の部屋以外の台所で食事をしている例があることにも注目した。こうして食寝分離を実現しつつ、かつ台所と食事室を一体化させる発想が生まれることになる。

実際の住み方調査をもとにした吉武研究室の試行錯誤の結果は、「51C型」の図面へと結実する。のちに鈴木は「ただか35平米の住宅で生活をすべて機能別に分けるといったことは考えられない。生活をいかに重ね合わせるか、重合させるかが重要な問題である。」として、炊事の間と食事の間を重ねること、なおかつ2つの居室は仕切って分離すること、すなわち「分離」と「重合」が一番の眼目であったと語っている⁽¹⁶⁾。こうした生活の実態調査にもとづいた研究から誕生した「51C型」を、公団は標準設計として採用し、さらに食事室兼台所を「ダイニングキッチン」と名づけ、のちに誰もが団地の間取りとして知るようになる「2DK」が誕生するのである。

以上に見てきたとおり、あこがれの「2DK」の背景には、12坪という限られた空間を与条件として、いかに機能的な生活を実現するかという困難な課題への取り組みとして作成された標準設計「51C型」があった。公団は、そこにステンレス製の流しやガス風呂、シンダー錠など、従来

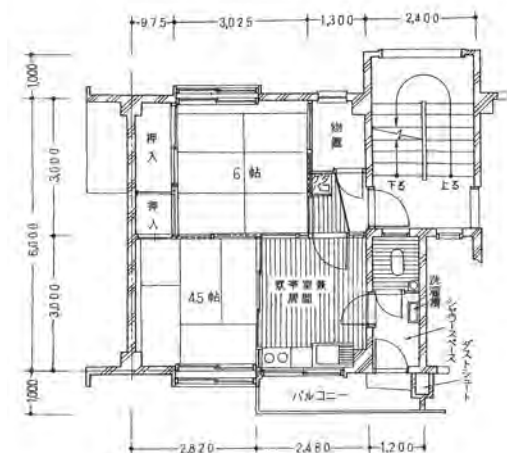


図1 51C型の間取り

の住まいにはなかった設備を加えていくことで、「生活革新」と呼ばれた新しいライフスタイルのイメージを作りだしていったが、その原点には、極小空間にどれだけ住み手の基本的要求を盛り込めるかという建築計画学の研究成果があった。

やがて全国に団地の建設が進むにつれて、1DK、2K、2LDKなど「2DK」を基本としたさまざまなバリエーションが登場し、現在ではこうした間取りの考え方は一般化したと言ってよい。しかし、たとえば3DKに対して、のちに鈴木は『「35平米の中で合理的な生活を」とぎりぎり考えたものに、ただ一部屋付け加えただけというのではあまりに安易である。3室、50平米になったなら、それに対応した生活の組立てを考えるべきだ」と批判しており⁽¹⁷⁾、「51C型」が決して理想の住宅像として設計されたものではなく、あくまで当時の限られた条件のなかで最良の成果を求めて作られたものである点は、あらためて確認しておきたい。

3. 県営藤棚アパートの建設

神奈川県が県営住宅の建設に着手したのは1947（昭和22）年度からであるが、それらの多くは戸建ての木造住宅であった⁽¹⁸⁾。横浜市内では三ツ沢住宅（神奈川区三ツ沢東町）・大倉山住宅（港北区大曽根町）などが初年度に建設されており、そして翌1948（同23）年5月には、最初の不燃アパートとして、コンクリートプレハブ1棟12戸が、横浜駅東口の金港橋の傍らに建設されている。この建物は3階建ての店舗併用住宅であったが、プレハブだったためか数年後には移築されたようである。

同年9月には、監理課・建築課・住宅課・営繕課の4課からなる県建築部が新設され、県営住宅の建設は同部住宅課が担当するようになった。そして同年11月から、西区藤棚町に鉄筋コンクリート造4階建て集合住宅の建設が着工し、翌年5月に3棟72戸が完成した。1949（同24）年度には5棟120戸、1950（同25）年度には2棟48戸と、3カ年にわたって建設が進められ、合計10棟240戸の住

宅団地が完成した。そのほか敷地内には、県の公舎として1棟24戸の集合住宅が建設されている。当時広瀬始親夫妻は藤棚アパートの3号棟に住んでおり、上記の建設年代と棟数から考えると、最初に建てられた3棟のうちの1棟であったと考えられる。

現在の藤棚団地⁽¹⁹⁾は、1981（同56）年～85（同60）年に建て替えられたもので、住棟配置が若干変わって敷地内に公園が設けられた以外は、当時と変わらない4階建ての中層集合住宅11棟244戸の規模を有している⁽²⁰⁾。この高台の地は、戦前に神奈川県立横浜第一中学校（現・県立希望ヶ丘高校）の校地であったところで、空襲で校舎を失った同校が、戦後移転したことにより、あらたな県営住宅の建設用地となったと考えられる。団地の前から藤棚町交差点へと下っていく急な坂道「神中坂」の名称は、この県立横浜第一中学校の略称に由来している。

さて、藤棚アパートは竣工直後から、地元紙の神奈川新聞に取り上げられているが、記事からは当時の県営住宅の申込方法やその人気ぶりを見てとることができる。以下、同紙記事から該当部分を引用してみよう。

「公募戸数は六十九戸（引用者注：まだ最初の3棟が完成した時点でのもの）、月収七千円から一万五千円程度の収入のある県下在住の勤者で、一定の職業をもち家族三人以上の世帯の者でなければ入居の資格がない、一カ月家賃千四百円、それに入居時に保証金を千四百円支払うことになっている。（中略）すでに十日迄に二千五百名が用紙を貰っている。申込者は通勤証明書、家屋の困窮状態証明書、収入証明、米穀通帳、額面千円住宅貯金証書を添えて申込む、公開抽選日は受付の翌日発表されるがここでも定員の数十倍の申込みがあつて住宅なき嘆きを呈するであろう。」⁽²¹⁾

終戦から4年ということもあって、家屋の困窮状態証明書や米穀通帳などが提出書類とされている点が注目されるが、やはり目を引くのはその高い倍率であろう。69戸の公募に対して2500名以上が申請するとすれば、単純計算して36倍を超え

る倍率である。のちの公団住宅で見られる数十倍の倍率と変わらない数字が、この時点の公営住宅で表れている点は興味深い。

むろんこの高い倍率は、当時の住宅難という背景を考慮すべきものではあるが、一方でこうした不燃アパートへのあこがれ、また立地条件なども人気の要因であったことは、全棟が完成したのちに掲載された以下の記事からも想像できるであろう。記事では、藤棚アパートの全景写真（図2）とともに、その住環境についても詳しく紹介されている。

「屋上まで通ずる階段をはさんで両側に六畳二間を主体とする一戸当り九坪半の家が八戸あり、これが三つ合わされた三階段の二十四戸で一棟（一棟だけ十六戸）をなしてる快適なテナメントである。（中略）棟と棟との間には相当の空地があり、花園や子供の遊び場や共同浴場がこの間に点綴し、近所には協同購買組合式売店もあるし、西前、藤棚の商店街も近いとあっては、文句をいう人のいるはずがない。（中略）神奈川県における公営不燃住宅群のモデル地区がこの藤棚アパートであろう。」⁽²²⁾

木造家屋が密集するなかの高台に、4階建て鉄筋コンクリート造の集合住宅群が建ちならぶ景観は、大きなインパクトを残すものである。記事にある「子供の遊び場」や「共同浴場」については、のちに広瀬写真で紹介するとして、地域の商店街と密接な関係を保った立地も藤棚アパートの人気を高める要因であったことは記事が伝えるとおり

である。

『神奈川県住宅建設10年の歩み』⁽²³⁾には、当時の藤棚アパートの住棟配置図（図3）と、2種類の間取りが掲載されている。配置図の手前（南側）にL字型に配置されている3棟が、最初に建設された1号棟から3号棟で、敷地の北側に残りの8棟（うち1棟が公舎）が配置されている。広瀬夫妻が住んでいた3号棟は、L字の左上にあたる。

部屋の間取りについては、「23-RC. 4-S. 14F」（図4）と「24・25・26-RC.4-S. 12F」（図5）の2種類が掲載されているが、冒頭の数字は設計年代（昭和での表記）を、「RC. 4」は鉄筋コン

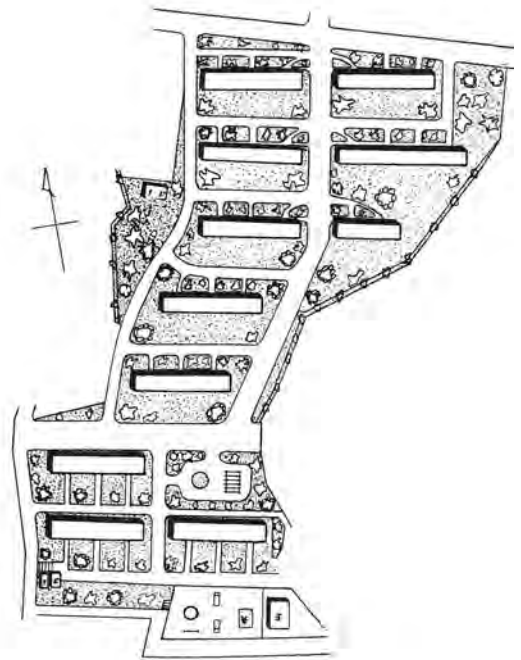


図3 藤棚アパートの住棟配置図

インターネット上ではご覧いただけません。

『横浜都市発展記念館紀要』の本紙をご覧ください。

図2 藤棚アパートの全景

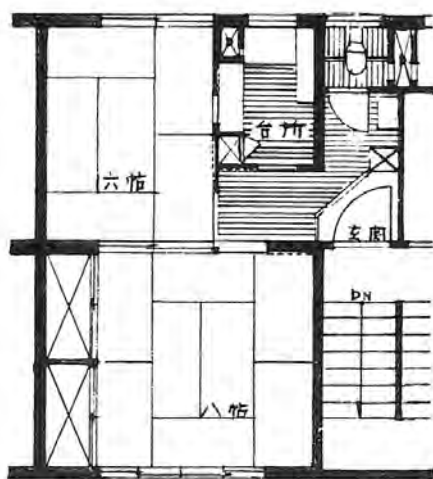


図4 藤棚アパート間取り 1

クリート（Reinforced Concrete）4階建てであることを、そして次の数字は畳数を表すものと考えられる。したがって、広瀬夫妻が住んでいた3号棟は、図4の間取りをもつ部屋であり、実際にそれは室内を写した写真からも裏づけられる。

藤棚アパートの建設関係資料としては、神奈川県立公文書館に、1950（昭和25）年に建設された2棟（10号棟、11号棟）の青焼図面をはじめ工事関係書類が保存されており⁽²⁴⁾、その平面は図5と一致する。この仕様書には「鉄筋コンクリート造集合住宅(49B型)」と記されており、49B型とは、前節で述べたとおり、国が1949（同24）年に定めた標準設計である。実際に、6畳間が2部屋と台所からなる図5は49B型と完全に一致しており、藤棚アパートが国の標準設計をもとに建設されたことが推測される。

では図4に相当する当初の3棟については、どうだったのだろうか。のちに吉武が委員として参加する「国庫補助住宅設計構造審議会」の構造部会の委員であった二見秀雄は、当時の『建築雑誌』上で47型の間取りを紹介し、48型については「殆ど変りがない」⁽²⁵⁾として、8畳間にあった床の間を廃して押入れを2間に行っている点など、いくつかの変更点を挙げているが、この押入れを2間にした間取りは図4とほぼ一致する。

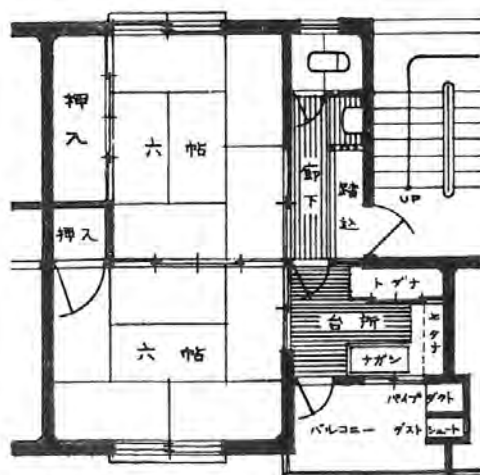


図5 藤棚アパート間取り 2

1948（同23）年9月に神奈川県建築部が新設され、その初代建築部長として建設省から鳥居捨蔵が着任していること⁽²⁶⁾を考えあわせても、藤棚アパートの初期3棟は、48型の間取りをもとに設計されたとみてよいであろう。全国での効率的な建設こそが標準設計の目的であったのだから、県では最初の取り組みとなる不燃構造の集合住宅の建設にあたって、国の標準設計を積極的に採用したと考えられる。

以上、藤棚アパートの建設過程と団地の概要を見てきたが、あらためて強調しておきたいのは、政府が「住宅金融公庫法」（1950年）、「公営住宅法」（1951年）、そして全国に団地が普及するきっかけとなる「日本住宅公団法」（1955年）などの住宅政策を打ち出す以前に、この藤棚アパートが誕生していることである。

公営住宅が、生活困窮者・低額所得者のためのものと位置づけられたのは、1951（同26）年の「公営住宅法」成立以降のことである。公団による団地の住戸設計が、従来の公営住宅との差別化を図るために、ステンレスの流しや浴室など設備の充実に注力したことを考えれば⁽²⁷⁾、終戦直後の早い段階で建設された藤棚アパートは、木造住宅が中心であった当時の公営住宅のなかでも、鉄筋コンクリート構造による不燃化と中層建築による高

密度の集住を実現した先駆的な事例であった。

近代住宅史の分野では、1948（同23）年6月に完成した都営高輪アパートが戦後初の鉄筋コンクリート造集合住宅として取り上げられるが⁽²⁸⁾、その完成からおよそ1年後に、同規模の藤棚アパートが完成していることは、横浜市内における初期公営住宅としてもっと注目されているであろう⁽²⁹⁾。そして、先の神奈川新聞の記事にあったとおり、高い倍率の抽選を経ないと入居できないほどの人気を呈していた藤棚アパートは、のちの高度経済成長期の「あこがれの団地」のイメージを先取りしていたのである。

4. 広瀬写真にみる藤棚アパートの住まいと暮らし

以上に見てきた県営藤棚アパートの位置づけを前提に、本節では広瀬写真からセレクトした31点の写真をもとに、大きく「広瀬家の間取りと暮らし」「藤棚団地の住環境」という2つの視点から、当時の公営住宅の暮らしについて紹介したい。

広瀬氏は横浜開港資料館に写真を寄贈する際に、それぞれの写真について記憶にもとづいたメモを付記されており、以下では、そのメモを随時参照しながら、写真とその背景について紹介していきたい。

4.1 広瀬家の間取りと暮らし

写真1は、寝室の窓辺にたたずむ広瀬始親氏であるが、広瀬氏のメモによると、鉄製の窓サッシの立て付けが悪く、すきま風で寒かったため、あとになって自分たちで障子を入れたという。2月に撮影された他の写真では室内の温度計が7℃を指しており、ストーブがあった部屋でも冬は相当な寒さであったと思われる。国の委員を務めていた二見秀雄は、47型の一部で試験的に窓の内部に紙障子を取り付けた結果、冬期の防寒に有効であったとして、49型から障子が採用されたと書いており⁽³⁰⁾、実際、県立公文書館に残された10号棟・11号棟の図面（49B型）では、最初の設計から窓の内側に障子を取り付けられている。

写真2は、広瀬家の寝室である。図4にある8畳間で、箆笥のほか障子の手前には鏡台が置かれている。写真には写っていないが、箆笥の置いてある壁の反対側が全面押入れになっている。

写真3は、6畳の居間で、広瀬家では日常的に椅子とテーブルを置いた生活が営まれていたことがわかる。テーブルに座っているのが千恵子夫人で、その背後には薬缶を載せたガスストーブが写っている。右側の壁に見える小窓は、キッチンとの連絡用に始親氏が手作りで取り付けただけのものである。当時の藤棚アパートはのちの「2DK」のようにダイニングをもたないため、写真からもうかがえるように、広瀬家では食事や客人を招いてのお茶などはこの居間でおこなっていた。なお、左奥に見えるのが始親氏の仕事机で、彼が愛用していたカメラや引き伸ばし器などの道具が天井からぶら下がっている。

写真4は、写真2の寝室から居間と台所を見通したものの。台所で調理された料理は、写真3に写っている小窓を通して、居間に置かれた食卓へと運ばれたのであろう。中央の柱の右側には黒電話が写っているが、メモによると、当時藤棚アパートで電話があったのは広瀬家だけだったとのこと、隣棟の知人宛にかかってきた電話を取り次いだこともしばしばあったという。そして右側の台所に氷式冷蔵庫とガスコンロが見えていることに注意したい。上段に氷を入れて下段のものを冷やす構造の氷式冷蔵庫は、戦前期から普及していたものであるが、あとの写真で紹介するように、このあと数年の間に、広瀬家では氷式冷蔵庫から電気冷蔵庫へと幾度も買い替えが進んでいく⁽³¹⁾。

写真5は、就寝前の風景。広瀬家の生活では6畳間を居間、8畳間を寝室というように、明確に食寝分離がなされていたことがわかる。広瀬夫妻には子どもがいなかったため、家族が増えていったときに生活空間がはたしてどのように変化していったのか、残された写真から知ることはできない。

写真6は、玄関を入ってすぐの土間で下駄の手入れをしている千恵子夫人。千恵子氏の後ろに見える箱型のものが下駄箱で、その左側に円形の洗

濯機が見える。広瀬氏のメモには、中に3枚か4枚の羽根のパルセーター（回転翼）が入っていて時間とともに反転するとある。日本の電気洗濯機は、1953（昭和28）年に三洋電機が開発した噴流式洗濯機が、従来の攪拌式洗濯機に代わって主流になっていくが、この円形の形状、また写真の撮影年代（1953年3月）を考えれば、従来の攪拌式洗濯機ではないかと思われる。昭和20年代当時、攪拌式洗濯機はまだ大卒のサラリーマンの初任給をはるかに上回る値段の高級品であったが、そのような洗濯機を備えていたことから、広瀬家の生活の豊かさがうかがえる。

写真7は、台所に立つ千恵子夫人。先に紹介した氷式冷蔵庫が写っているほか、千恵子氏が右手を置いている流しは、のちの「あこがれの団地」の売りとなるステンレス製流しではなく、昔ながらの人研ぎ（人造石の研ぎ出し仕上げ）の流しである。公団が採用したステンレス製流しを中央におくポイントシステムと異なり、コンロが置かれた調理部分と流しとがL字型に配置されている点も、当時の台所の配置を知るうえで興味深い。

写真8は、ガスコンロで炊飯中の釜を写したものの。この写真が撮影された1953（同28）年の時点では、まだ各家庭ではこのような釜でご飯を炊いており、火加減の調節を含めて炊飯はたいへん手間のかかる作業であった。「寝ている間にご飯が炊ける」というキャッチフレーズで、東芝が電気釜の販売を開始するのは、1955（同30）年のことである。

写真9は、寝室を掃除中の千恵子夫人。千恵子氏は非常にこまめに掃除をする人であったと始親氏は回想しているが、彼女が手にしている電気掃除機は、筒型の形状や上部に付けられた取っ手などの特徴から、1958（同33）年に松下電器から発売された電気掃除機とみてよいだろう。写真の撮影年代（1958年8月）を考えれば、広瀬家は最先端の掃除機を購入していたことがわかる。

写真10は、居間に設けられたテレビで1958（同33）年の撮影。国内でテレビ放送が開始されたのは1953（同28）年のことで、周知のとおり、昭

和30年代に入ると、テレビ・洗濯機・冷蔵庫は、あこがれの家電製品として「3種の神器」と呼ばれるようになる。広瀬氏のメモによると、広瀬家のテレビは三洋電機の14インチであったというから、同社が1953（同28）年12月に販売を開始した最初の白黒テレビ「17-C231」ではなく、1955（同30）年以降、毎年発売されている「14-T」型のいずれかであろう。この14インチというサイズは、以後テレビの標準サイズとなっていく。

写真11～14は、写真4と同じアングルで撮影されたものであるが、台所の家電製品の変化に注目したい。写真11（1956年撮影）では、まだ写真8と同じ釜が写っているが、冷蔵庫はすでに氷式ではなく、日立の電気冷蔵庫に買い替えられていることがわかる。これが2年後の写真12（1958年撮影）になると、その日立の電気冷蔵庫の上にミキサーが置かれている。ミキサーは昭和20年代末から各社製品化が進められており、写真から製品の設定は困難であるが、当時ミキサーを利用して野菜や果物のジュースを飲むことが流行していたことを物語る写真である。そして翌年の写真13（1959年撮影）では、もう電気冷蔵庫が新しいものに買い替えられていることがわかる。その形状から、ドアノブが栓抜きにもなる松下電器製のものと思われる。さらに写真14（年代不明）になると、また冷蔵庫が買い替えられており、東芝製と思われる2ドアの冷蔵庫が写っている⁽³²⁾。あわせて台所の奥には、円筒形の湯沸器が設置されていることにも注目したい。形状からして、昭和30年代に普及したエンジェル3号ガス湯沸器であろう。湯沸器の登場によって、台所に立つ主婦たちは冬場のつらい水仕事から解放された。

以上、広瀬家の室内を撮影した写真から、おもに間取りと生活道具類に着目して紹介した。とくに注目されるのは家電製品の浸透度で、間取りや流しなど設備の点では、前述のとおり、のちの公団住宅の「2DK」とは大きく差があるものの、新しい家電製品が数年のあいだに次々と生活に取り入れられていっている様子がよくわかる。

4.2 藤棚アパートの住環境

続いて、藤棚アパートの周辺環境や人々の暮らし・コミュニティなどがうかがえる写真を紹介したい。

写真15は、広瀬夫妻の住む3号棟から北側を俯瞰した風景で、右下にはアパート住民のための公園が設けられている。これは配置図（図3）のとおりである。

写真16は、2号棟と3号棟の間から奥を見通した風景であるが、2号棟の建物側面に、「No.2 25-48」と住棟表記があることに注意したい。「No.2」は2号棟を意味するとして、1棟は24戸で構成されていることから、「25-48」は部屋番号を表しているのであろう。1棟ごとに部屋番号を付けるのではなく、1号棟から通し番号で部屋番号が付けられていたことがわかる。

写真17は、同じく敷地内の風景。手前の標識に「歩行者優先 県営藤棚アパート自治会」と書かれているのが見える。現在では舗装された車道が通っているが、当時はまだ舗装もされておらず、「歩行者優先」とあるとおり、アパート住民の通路としての性格が強かったことをうかがわせる。もっともマイカーの時代が訪れる以前のことであるから、敷地内に入ってくる車といえば、のちに紹介する行商のトラックなどの商業車が主なものであった。そして標識からは、この時点（1956年撮影）でアパート内に自治会が組織されていることもわかる。ひとつの敷地内に集住することから誕生したあらたなコミュニティの形態である自治会は、藤棚アパートにおいても早くから組織されていたと言える。広瀬写真には他にも自治会の掲示板を写したものなどがある。

写真18は、手前の看板に書かれているとおり「子供の遊び場」で、配置図（図3）の一番下に描かれている一画がそうである。周囲の敷地から一段低くなったところに、シーソーやブランコ、すべり台などの遊具が備えられているが、現在ではほとんど見ることもなくなった遊具が、中央に写っている「回転塔」である。写真19のように、回転塔で遊ぶ子どもたちの姿は広瀬写真に何度も登

場するが、男の子も女の子も皆一緒になって遊んでおり、その生き生きとした表情が非常に印象的である。

写真18の左奥に見えているのが銭湯の「中の湯」で、他の公営住宅と同じく、藤棚アパートでは最初から風呂は備えられていなかった。のちの公団住宅では各部屋にガス風呂を備えていることが売りになるが、当時は銭湯が一般的な時代であった。配置図（図3）でも同じ敷地内の扱いで右下に建物の輪郭が描かれている。他の広瀬写真でも、冬場の風呂上がりに着込んで部屋へ戻ってきた始親氏の姿が見られる。この「子供の遊び場」は、現在も同じように児童遊園として利用されており、「中の湯」も現役である。

写真20は、フラフープで遊ぶ子どもたち。1958（昭和33）年にアメリカでの流行を受けて、国内でも同年10月に発売が開始されて大ブームとなったフラフープであるが、健康被害や交通事故などさまざまな問題が指摘され、その年のうちにブームは終息を迎える。写真20が撮影されたのは同年11月26日。ブーム真っ盛りのなかでフラフープに興じている藤棚アパートの子どもたちを捉えた写真である。

写真21は、虫採りをする子ども。鉄筋コンクリートの四角いアパートは、人工的で無機質なイメージを与える一方で、まだ周囲には土の地面や緑がたくさん残っていて、子どもたちの遊びには以前と大きな変化がないことを教えてくれる。

写真22は、敷地内のゴミ焼却場。配置図（図3）では、方位記号のすぐ右側に描かれた小さな施設がゴミ焼却場にあたる。子どもたちのよい遊び場でもあったのだろう。スクーターをもった女の子がいる。

写真23は、藤棚アパートでのコミュニティの一幕を捉えたもの。夏休みのラジオ体操の風景である。3号棟隣の公園の前にめいめい集まって体操をしているが、住民たちは現在車道になっている部分にまで広がっており、現在のような車社会が到来する以前の風景を感じることができる。

写真24は、夏祭りで神輿をかつぐ子どもたち。

背後の無装飾な四角いアパートと、上半身裸の子どもたちが発する熱気とのミスマッチが、先ほどの虫採りをする子どもの写真と同様、時代が変わった部分と変わらない部分を教えてくれているようで興味深い。

写真25は、藤棚アパートの子ども会の風景。広瀬氏のメモによると、ボランティアの女子学生が子どもたちの指導にあたっていたという。これも当時の藤棚アパートのコミュニティ活動の一端を教えてくれる写真である。

写真26も、25と同じ日に撮影された子ども会の風景であるが、注目したいのは奥に建設中の建物である。広瀬氏のメモには「シェルター・ハウス」と書かれているが、現在でいうコミュニティ・ハウスや自治会館のような施設を指すのであろう。現在は、児童遊園の敷地内に自治会館が建てられているが、この写真を見るかぎり、当時の場所は3号棟隣の公園内のようなようである。

その内部を写したものが、写真27である。撮影年代は不明であるが、新しくできたシェルター・ハウスが、子どもたちの遊び場となっている様子がわかる。手前では、ダイヤモンドゲームとして知られるボードゲームで遊んでいる子どもたちがいる。広瀬氏は「音楽鑑賞、掃除、遊具責任もって整頓する様、皆良い子ばかりでした。」と記しており、ピンポン大会なども開かれたという。

写真28は、伊勢町商店街の宣伝カー。全11棟264戸の住宅群である丘の上の藤棚アパートは、坂の下商店街にとって絶好の顧客であったことだろう。面白がって宣伝カーに子どもたちが飛び乗っている姿が微笑ましい。

写真29は、リヤカーでやってきたアイスクャンデー売り。ラムネの壺なども見える。買いに来た子どもは和傘を差している。

写真30は、オート三輪でやってきた行商の八百屋。広瀬氏のメモによると、野菜や魚を売りに来る行商人が毎日オート三輪でやってきたという。写真31は、その風景にさらに豆腐売りが増加したもの。昔ながらの振売のスタイルである。

以上、藤棚アパートの周辺環境や、人々の暮ら

し・コミュニティの状況を写真で紹介してきた。広瀬氏が子どもたちの無邪気な姿を積極的に捉えようとしている撮影意図もあるだろうが、当初から子ども向けの遊園が整備されており、夏祭りや子ども会など、アパートの子どもたちを大切にしていた行事が頻繁に開催されていたことがうかがえる。また住民の共同利用施設としてコミュニティ・ハウスが新設された(1959年)点にも注目したい。オート三輪による行商は、昭和30年代の団地でよく見られた光景であるが、藤棚アパートでも変わらない買い物風景が繰り広げられていたことがわかる。

5. おわりに —初期公営住宅としての藤棚アパート—

以上、横浜開港資料館が所蔵する広瀬写真をもとに、初期公営住宅としての藤棚アパートの様相と当時の広瀬家の暮らしについて紹介した。あくまで一家族の例ではあるが、冒頭で紹介したような、各地で紹介されてきた高度成長期の「2DK」団地と比較してみると、幾つか興味深い点が見えてくる。

そのひとつは、広瀬家では最初から和室の2部屋を居間と寝室という風に明確に使い分け、ダイニングテーブルと椅子による洋風の生活を実現させていた点である。鈴木成文らによる公団団地の追跡調査では、ダイニングキッチンにちゃぶ台を置いて食事をしていたり、新たな生活スタイルになじめない家族もあったことが報告されているが⁽³³⁾、広瀬家では当初からテーブルと椅子を用いた生活が実現していた。前述のとおり、建物そのものはのちの公団団地に比べて設備に差があるにも関わらず、暮らしの部分については「ダンチ族」に先駆けていたともいえる。この点は昭和30年代に入ると、次々と新しい家電製品が導入されていく様子からもうかがえる。

こうした点が把握できる理由は、広瀬氏が写真を撮影した時期が昭和20年代後半から30年代前半にまたがっているという点に求められる。「2DK」誕生以前の公営住宅での暮らしのなかに、

公団設立以降の新しい団地生活のスタイルが浸透していく様子が捉えられるのは、この撮影期間ゆえのことであり、これは広瀬写真がもつ資料的価値のひとつの側面を物語るものである。

そして藤棚アパートの特徴として、集合住宅としての立地にも注目したい。とくに団地建設初期の時代には、その多くが都市部に建設されており、藤棚アパートもその一群に属すると言える。のちの高度経済成長期に住宅地開発が郊外へと展開し、団地の規模が一気に拡大するのに比べて、初期の集合住宅は4階建ての中層規模のものが多い。その意味では、現在、郊外部の大規模団地で建物の老朽化、住民の高齢化、すなわちニュータウンのオールタウン化が問題となっているなかで、これら初期の団地群は、都市居住という観点からいまだ住宅ストックとしての活用の利点は残されているのではないか。

その原点に、終戦後の深刻な住宅難のなかで、豊かな生活の実現を目指した先人たちの努力があったことは、本稿で見てきたとおりである。広瀬写真に記録された県営藤棚アパートは、そうした初期の集合住宅のあり方をあらためて私たちに教えてくれる存在である。

最後に、本稿執筆にあたって、広瀬始親撮影写真の調査には横浜開港資料館の伊藤泉美主任調査研究員の協力を得た。また藤棚団地に関する神奈川新聞の記事については、同社編集局アーカイブ室平松晃一氏から多くのご教示をいただいた。同社アーカイブ室のご協力に感謝いたします。

■注

- (1) 高度成長期の団地をテーマにした展示については、当館・横浜開港資料館・横浜市史資料室の3施設で開催している、戦中・戦後期の都市横浜に関する研究会の場で、青木俊也氏(松戸市立博物館)、金子淳氏(桜美林大学)から多くのご教示をいただいた。すべてを網羅しているわけではないが、以下のような企画展が開催されている。
「多摩ニュータウン開発の軌跡－『巨大な実験都市』の誕生と変容」(パルテノン多摩、1998年10月24日～12月20日)、企画展「戦後松戸の生活革新－新しい暮らし方へのあこがれ－」(松戸市立博物館、2000年10月7日～11月16日)、特別展「無線の村から団地の町へ」(上福岡市立歴史民俗資料館、2001年11月～2002年1月)、「団地ライフ－『桐ヶ丘』『赤羽台』団地の住まいと住まい方－」展(北区飛鳥山博物館、2003年10月25日～12月7日)、特別展「千里ニュータウン展－ひと・まち・くらし－」(吹田市立博物館、2006年4月22日～6月4日)、「大団地展－高蔵寺ニュータウン再発見－」(かすがい市民文化財団、2006年5月27日～6月18日)、企画展「ノスタルジック昭和～あの日・あの時～」(八千代市立郷土博物館、2007年6月12日～9月9日)、「くらしのうつりかわり展 団地の時代－明舞団地誕生－」(明石市立文化博物館、2009年2月11日～3月29日)、特別展「開発の記録～資料に見る多摩ニュータウン～」(パルテノン多摩、2010年3月20日～5月10日)など。
- (2) もちろん、戦後の生活史展示のすべてが団地に限られているわけではない。同じ戦後住宅の復元展示ではあっても、たとえば足立区立郷土博物館(2009年リニューアル)の常設展示では、木造平屋の都営住宅が再現されており、高度成長期の団地とは異なる戦後の暮らしを紹介する場となっているし、葛飾区郷土と天文の博物館(1991年開館)の常設展示でも、昭和30年代の町工場のなかの住居が復元されている。
- (3) 『横浜市史Ⅱ 第3巻(下)』(横浜市、2003年)、pp.369-388。
- (4) 展示図録『戦後松戸の生活革新－新しい暮らし方へのあこがれ－』(松戸市立博物館、2000年)。

- 青木俊也『再現・昭和30年代 団地2DKの暮らし』（河出書房新社、2001年）
- (5) 伊藤泉美「横浜ノスタルジアー昭和30年頃の街角」『ハマ発Newsletter』第8号(2007年1月)、同「広瀬写真の魅力と史的価値」『開港のひろば』第113号(2011年7月)
- (6) 会期：2007年2月1日～4月15日、会場：横浜都市発展記念館
- (7) 会期：2011年7月27日～10月23日、会場：横浜開港資料館
- (8) 横浜開港資料館編『広瀬始親写真展 横浜ノスタルジア 昭和30年頃の街角』（河出書房新社、2011年）
- (9) 内田青蔵・大川三雄・藤谷陽悦編『図説・近代日本住宅史 幕末から現代まで』（鹿島出版会、2001年）、小沢朝江・水沼淑子『日本住居史』（吉川弘文館、2006年）など。また藤森照信「3DK誕生記ー計画学者とダイニング・キッチンー」『昭和住宅物語 初期モダニズムからポストモダンまで23の住まいと建築家』（新建築社、1990年）では、西山卯三・吉武泰水・鈴木成文ら関係者へのインタビューが掲載されている。
- (10) 鈴木成文・上野千鶴子・山本理顕・布野修司・五十嵐太郎・山本喜美恵『「51C」家族を容れるハコの戦後と現在』（平凡社、2004年）、鈴木成文『51C白書 私の建築計画学戦後史』（住まいの図書館出版局、2006年）
- (11) 『神奈川県住宅建設10年の歩み』（神奈川県建築部、1958年）
- (12) 以下、終戦後の復興住宅政策については、西山卯三「敗戦後の住宅難」『すまい考今学ー現代日本住宅史』（彰国社、1989年）を参照した。
- (13) 西山卯三「住居空間の用途構成に於ける食寝分離論」『日本建築学会大会論文集』（1942年4月）
- (14) 西山卯三『これからのすまい』（相模書房、1947年）
- (15) 鈴木は、「食寝分離」の考え方をもとに「寝室分解」という言葉を用いて、子どもが成長して家族が分かれて寝ようになる段階がいつ訪れるかに注目し、狭い方の副室が台所に接している方が、安定的に食事の場となり、主室に家族がまとまって寝るケースが多い、すなわち「寝室分解」が遅いという関係性を見出した。吉武泰水・鈴木成文「都市小住居における住まい方ー特に二室住居における就寝・食事について」『日本建築学会論文集』（1953年3月）
- (16) 前掲注(10)、『「51C」家族を容れるハコの戦後と現在』。
- (17) 同上。
- (18) 以下、神奈川県による公営住宅の建設については、前掲注(11)『神奈川県住宅建設10年の歩み』、および『神奈川県建築部30年の歩み』（神奈川県県銀杏会、1979年）を参照した。
- (19) 建設当時はまだ「団地」という言葉は普及しておらず、当時の記録はすべて「藤棚アパート」と表記されているが、現在では「藤棚団地」の名称が使用されている。
- (20) 現在の県営藤棚住宅については、神奈川県県土整備局建築住宅部住宅計画課住宅企画グループ編『平成25年度版 かながわの住宅』（神奈川県県土整備局、2014年）掲載の情報による。
- (21) 『神奈川新聞』1949年5月11日号。
- (22) 『神奈川新聞』1952年9月20日号。
- (23) 前掲注(11)。
- (24) 「昭和25年度 県営藤棚鉄筋混凝土設計書」（神奈川県立公文書館所蔵）
- (25) 二見秀雄「鋼筋コンクリート公営アパートの設計と構造」『建築雑誌』第64巻第753号(1949年7月)
- (26) 前掲注(18)、『神奈川県建築部30年の歩み』、p.47。
- (27) 『日本住宅公団10年史』（日本住宅公団、1965年）、pp.136-139。
- (28) 高輪アパートの建設経緯については、藤岡洋保・横山むつみ「都営高輪アパートの建設経緯について」『日本建築学会学術講演梗概集』（1988年9月）、内田青蔵・山口廣・藤岡洋保・藤谷陽悦「都営高輪アパートの図面と高輪アパート研究会について」『日本建築学会学術講演梗概集』（1991年8月）、藤岡洋保「戦後初の鉄筋コンクリート造集合住宅・都営高輪アパートの調査報告について」『建築雑誌』第107巻第1325号(1992年3月)に詳しい。
- (29) 同じ1948(昭和23)年度には、市営住宅として4階建て鉄筋コンクリート造の栗田谷住宅2棟48戸も完成している。『横浜市の公営住宅 住環

境の向上をめざして』（横浜市建築局総務部住宅計画課、1987年）に掲載された栗田谷住宅の間取りは図4とほぼ同じであり、横浜市でも標準設計の48型を採用していたと考えられる。

- (30) 前掲注(25)。
- (31) 昭和30年代の家電製品については、前掲注(4)『再現・昭和30年代 団地2DKの暮らし』のほか、久保道正編『家電製品にみる暮らしの戦後史』（ミリオン書房、1991年）、『につぼん家事録』（建築資料研究社、2002年）、清水慶一『あこがれの家電時代』（河出書房新社、2007年）などを参照した。
- (32) 一般的に、2ドア冷蔵庫の普及は昭和40年代以降とされているが、東芝は1963(昭和38)年に冷蔵庫と冷凍庫が独立した2ドア冷蔵庫を製造しており、この写真だけ少し撮影年代が他と離れている可能性もある。
- (33) 前掲注(10)、『51C白書 私の建築計画学戦後史』

■図版出典

- 1 51C型の間取り 『住宅建設要覧－昭和28年－』（建設省住宅局編、日本建築学会、1953年）より 当館所蔵
- 2 県営藤棚アパート全景(1952年) 神奈川新聞社提供
- 3 藤棚アパート配置図 『神奈川県住宅建設10年の歩み』（神奈川県建築部、1958年）より 神奈川県立図書館所蔵
- 4 藤棚アパート間取り1 同上
- 5 藤棚アパート間取り2 同上

写真一覧

写真	タイトル	撮影年代	フィルム番号
1	窓辺にたたずむ広瀬始親	1953(昭和28)年2月17日	Ac1-002-007-036
2	寝室	1953(昭和28)年4月5日	Ac1-002-027-108
3	居間	1953(昭和28)年4月5日	Ac1-002-027-110
4	居間と台所 1	1953(昭和28)年4月5日	Ac1-002-027-114
5	就寝前の寝室	1954(昭和29)年5月28日	Ac1-002-170-035
6	下駄の手入れをする広瀬千恵子	1953(昭和28)年3月4日	Ac1-002-010-011
7	台所に立つ広瀬千恵子	1953(昭和28)年4月5日	Ac1-002-027-111
8	釜での炊飯	1953(昭和28)年8月8日	Ac1-002-059-031
9	掃除機をかける広瀬千恵子	1958(昭和33)年8月15日	Ac1-002-682-023
10	テレビが置かれた居間	1958(昭和33)年12月24日	Ac1-002-730-034
11	居間と台所 2	1956(昭和31)年8月12日	Ac1-002-531-002
12	居間と台所 3	1958(昭和33)年8月15日	Ac1-002-682-026
13	居間と台所 4	1959(昭和34)年8月11日	Ac1-002-782-023
14	居間と台所 5	不明	Ac1-002-931-031
15	敷地内の公園	1958(昭和33)年9月28日	Ac1-002-698-022
16	敷地内にならぶ住棟	1955(昭和30)年12月10日	Ac1-002-414-010
17	敷地内の道路	1956(昭和31)年4月22日	Ac1-002-464-032
18	敷地内に設けられた遊び場	1958(昭和33)年9月28日	Ac1-002-698-020
19	回転塔で遊ぶ子どもたち	1953(昭和28)年8月8日	Ac1-002-059-005
20	フラフープで遊ぶ子どもたち	1958(昭和33)年11月26日	Ac1-002-716-025
21	虫取りをする子ども	1954(昭和29)年7月17日	Ac1-002-186-031
22	スクーターで遊ぶ子どもたち	1953(昭和28)年3月4日	Ac1-002-011-004
23	夏休みのラジオ体操風景	1956(昭和31)年8月	Ac1-002-526-021
24	夏祭りで神輿をかつぐ子どもたち	1953(昭和28)年8月21日	Ac1-002-060-011
25	子ども会の日	1959(昭和34)年6月1日	Ac1-002-772-009
26	建設中のシェルター・ハウス	1959(昭和34)年6月1日	Ac1-002-772-007
27	シェルター・ハウスでの子どもたち	不明	Ac1-002-931-030
28	伊勢町商店街の宣伝カー	1954(昭和29)年2月20日	Ac1-002-130-016
29	リヤカーのアイスキャンデー屋	1954(昭和29)年8月8日	Ac1-002-191-009
30	行商の八百屋	1956(昭和31)年6月9日	Ac1-002-489-016
31	行商のオート三輪と豆腐屋	1956(昭和31)年8月	Ac1-002-527-029

* 撮影年代は広瀬始親氏のメモによる。タイトルは広瀬氏のメモをもとに筆者が付けた。



写真1 窓辺にたたずむ広瀬始親



写真2 寝室



写真3 居間



写真4 居間と台所 1



写真5 就寝前の寝室



写真6 下駄の手入れをする広瀬千恵子



写真7 台所に立つ広瀬千恵子

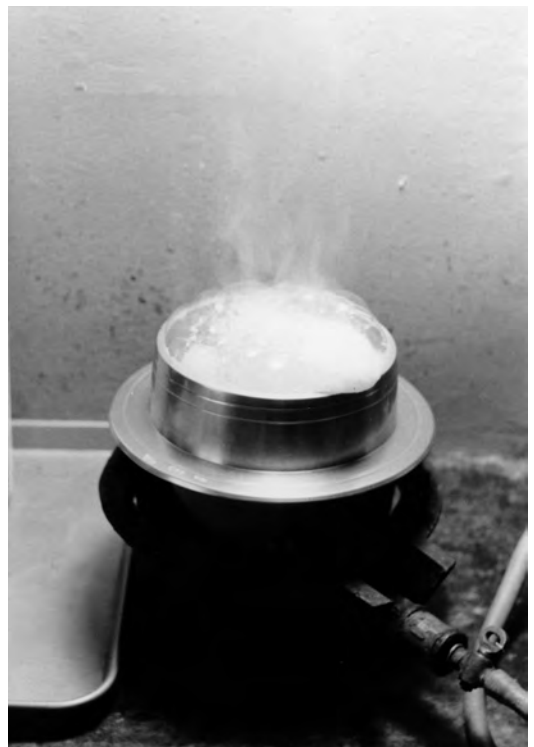


写真8 釜での炊飯



写真9 掃除機をかける広瀬千恵子



写真10 テレビが置かれた居間



写真11 居間と台所 2



写真12 居間と台所 3



写真13 居間と台所 4



写真14 居間と台所 5



写真15 敷地内の公園



写真16 敷地内にならぶ住棟



写真17 敷地内の道路



写真18 敷地内に設けられた遊び場



写真19 回転塔で遊ぶ子どもたち



写真20 フラフープで遊ぶ子どもたち



写真21 虫取りをする子ども



写真22 スクーターで遊ぶ子どもたち



写真23 夏休みのラジオ体操風景



写真24 夏祭りで神輿をかつぐ子どもたち



写真25 子ども会の日



写真26 建設中のシェルター・ハウス



写真27 シェルター・ハウスでの子どもたち



写真28 伊勢町商店街の宣伝カー



写真29 リヤカーのアイスクャンデー屋



写真30 行商の八百屋



写真31 行商のオート三輪と豆腐屋